
デジモンアドベンチャー 0 0

F A L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー00

【Nコード】

N92530

【作者名】

FALL

【あらすじ】

これは、語られることのなかった、人類とデジモンの最初の出会
いの物語

そして、人類とデジモンが共存の道を歩みだしてから訪れた、再会
の記録である

始まりの物語

光が丘の爆発事件――今はデジモン同士の戦いとして解決された事件が、なぜ起こったのだろうか

それを調べていくうちに、コウシロウはゲンナイから驚くべき言葉を告げられる

「君たちが生まれるずっと前に、最初の選ばれし子供達が居た」

ゲンナイから語られる驚きの物語

そして、ゲンナイはコウシロウ達に約束させた

「決して、彼らにこの事を告げてはいけない。彼らは、自分たちが選ばれし子供達だったことを、自らの意志で忘れたのだから」

これは、語られることのなかった、人類とデジモンの最初の交流

そして、デジモンと人類が共存の道を歩み出した今、再び訪れる出会
いまでの記録である

疑惑

「コウシロウはん、どないしなはったんでつか？」

コウシロウがパソコンを見つめながら考え込んでいると、テントモンが話しかけてきた

つい先ほどまではコウシロウの母と話していたため、おそらく話に一段落ついたのだろう、と、コウシロウは推測する

「気になることがあるんだ」

「気になること、でつか？なんです、それ？」

予想通り、テントモンは食いついてきた

コウシロウは椅子を回転させると、テントモンに向き直る

「僕らが『選ばれし子供』になった前提条件はわかるよね？」

「ああ、確か、光が丘でデジモンが暴れたのを見た子供たちの中で、後になって引越した子供たちでっしょ？」

テントモンの言葉に、コウシロウは頷く

「それがどうかしはったんでっか？」

「おかしいと思わないかい？」

おかしい、とは何のことだろうか

テントモンは首を傾げて考えるが、思いつかないようだ

「何故、あの時、タイチさんの家にアグモンが訪れたんだろう？僕はそれが原因でデジタルワールドに行ったわけだけど、だったらあの事件が起きた理由があつたって良いはずなんだ。でも、不思議なことにその理由が見つからない。そして、もう一つ解らないことがあるんだ」

「なんです？もう一つって？」

歩くのが面倒だったのか、テントモンは飛んでコウシロウの傍による

「……なぜ、タイチさんの家のパソコンが、デジタルゲートを開けたのか。タイチさんの話だと、デジタマはパソコンから出現したらいいんだ。つまり、タイチさんの家のパソコンは、デジタルゲートが開いていたことになる」

「……確かに、気になりまんない」

コウシロウは、もう一度椅子を回転させ、パソコンに向き直った

「だから、今からゲンナイさんに聞いてみるんだ」

そして、作成していたメールを送信した

――デジタルワールド

ゲンナイ宅

「ん、コウシロウからメール？」

デジタルワールドの管理のため、ゲンナイたちエージェントは働き詰めだった

それが一段落つき、ゲンナイが家に帰ってきたのがつい先ほどだ

ゲンナイは、コーヒーを啜りながらメールを開く

そして、目を見開いて動きを止めた

『ゲンナイさんへ

突然のメール、驚かれたことでしょう

ですが、僕はどうしても知りたいことがあるんです

僕らが選ばれし子供となり、デジタルワールドへ呼ばれる原因となった、光が丘でのグレイモンとパロットモンの激突……光が丘にゲートが開いたのはともかく、なぜタイチさんの家のパソコンにゲートが開き、デジタマが現れたのでしょうか？

僕にはその理由がわかりません

ゲンナイさん、これは僕の推測なのですが、もしかしたら、あの事件が起こる前にも、選ばれし子供たちが居たのではないですか？

それも、僕らの……いえ、少なくとも、タイチさんの身近な人物にお返事待ってます

コウシロウ』

メールを読み終わると、ゲンナイは一度息を吐いた

そして、小さな笑みをこぼすと、コウシロウに返信するためのメールを作成する

『明日の朝10時

コウシロウの部屋に、選ばれし子供たちを集めてくれ
すべてをはなそう』

送信し終わった後、ゲンナイは数多くの引き出しの内、その1つを開ける

そこには、タイチたちが持っているものと同じ形のデジヴァイス

そして、一冊の日記が置かれていた

ゲンナイの話（前書き）

今回の後書きに、ちょっとしたお願いがあります

ゲンナイの話

翌日、泉光子郎宅

この部屋に集まったのは、コウシロウ含め、タイチ、ヤマト、ソラ、ジヨウ、ミミ、タケル、ヒカリの8人……そう、あの冒険のときのメンバーだ

ダイスケたちはというと、決して仲間外れにされたわけではない

ダイスケとケンは中学のサッカー部の練習試合があり、ケンと付き合っているミヤコはその応援

そして、イオリは剣道の全国大会に進出したため、4人が4人とも都合が悪かったのだ（約1名は違うきもするが）

逆に今日だからこそ集まることが出来たのは、ミミとヤマトの2人

ミミは現在、アメリカに住んでいるのだが、『怪獣騒ぎ』がデジモンの登場によって解決したため、また日本に戻ってくるようになった

そのため、ミミは両親に無理を言って、1人だけ早めに日本へ戻ってきていたのだ

そこへコウシロウからの連絡があり、集合できたわけである

一方、ヤマトはというと、所属しているバンドが熱狂的なファン（

主にダイスケの姉）により全国レベルの知名度を誇るようになり、しかも人気まで出てしまったため、すっかりプロのミュージシャンになってしまっていた

今日は久しぶりの休みであり、本来はソラと2人で過ごす予定だったのだが、ゲンナイの話というのが2人とも気になったため集合できたのである

「なあジョウ、腹減ったあ……」

「ゴマモン、さっきおにぎり食べたじゃないか」

「もう2時間も前だぞ！全然さっきじゃないやい！」

2時間前なら十分さっきだろう、とは言わなかった

言ったところで聞くような性格ではないことは、すでにわかりきっているからだ

「ねえミミ、こないだね、始まりの町で孵ったデジタマね、スカモンとチューモンのだったのよ」

「本当に！？今度もまたスカモンとチューモンになるのかしら？」

「多分、なるわね……」

1人と1匹の頭の中で、スカモンとチューモンの記憶を呼び起こすが

「……良い思い出が無いわ……」

「できれば別のデジモンに進化してほしいわね……」

その願いが叶う可能性は低そうである

「タケルー、エレキモンがね、久しぶりに遊びに来てって言うてたよ？」

「そうなの？じゃあ今度行こうか」

「うん！」

タケルの頭の上で、パタモンは嬉しそうに笑った

「ソラあ、なんだか楽しいねっ」

「うふふ、そうねピヨモン」

笑顔で語り合うソラとピヨモン

だが、その横に座っているヤマトは少し機嫌が悪そうだ

「ヤマト、なんで機嫌が悪そうなのさ？」
「……別に」

ソラと2人で居られる少ない時間を邪魔されたのは確かに気に食わなかったが、自分が今回の話に興味を持ったのも事実

ヤマトは、誰にもばれないように小さなため息をつく

それに気づいたソラに小さく笑われたが、ヤマトは全く気づかなかった

「ヒカリ、少し、狭くないか？」

「同感ね、テイルモン」

少々苦笑い気味に話すヒカリとテイルモン

それもそのはず、コウシロウの部屋には現在、8人の人間と8匹のデジモンが居るのだから

「タイチい、僕眠い……」

「しっかりしろよアグモン、もうすぐ10時だぞ？」

「そんなこと言っただってえ……ZZZZ」

「寝るなあ！」

アグモンの肩をつかみ、前後に振って気を持たせる

だが、アグモンの意識は回復する様子はない

「……コウシロウはん、賑やかでんな」

「まあ、この8人が集まるのは久しぶりだし……しょうがないよ」

苦笑いで返すコウシロウ

一度部屋を見渡した後、壁に掛けた時計に目を移す

短針は9と10の間、長針は11と12の間をそれぞれさしていた

そろそろ、時間のようだ

「コウシロウはん、パソコンが光ってまっせ？」
「え？」

振り返って見てみると、確かにパソコンから目映い光が発せられていた

思わず立ち上がり、パソコンと距離をとる

他のメンバーも気づいたらしく、皆が皆身構えていた

やがて、光の中から懐かしい声が聞こえてくる

「やあみんな。久しぶりだね」

彼らが旅をしたときとは違い、若い青年のような姿の、人間に見える姿

デジタルワールドの管理を任されたエージェントの1人

ゲンナイが、現れた

現れたゲンナイに対し、彼らはそれぞれ挨拶を返す

眠りかけていたアグモンもようやく起きたようで、それに気づいたタイチに軽く小突かれていた

コウシロウは、ゲンナイに椅子を勧めると、自らはベッドに腰掛ける

ベッドには既にミミが座っていたのだが、コウシロウが座る際に少し動いて場所を開けていた

ゲンナイは、コウシロウから勧められた椅子に座ると、すぐに口を開く

「さて、僕の話というのは他でもない、選ばれし子供たち……いや、君達に関することだ」

ゲンナイの発言に、ほとんど全員が意味が分からないと言わんばかりの顔をする

そのような顔をしなかったのは、疑問を抱いたコウシロウとテントモン、そして予めコウシロウから話を聞いていたタイチだけだった

「コウシロウの疑問はこうだ。『君達の……少なくとも、八神タイチの身近な人物に、誰よりも早くデジモンと交流をもった人間が居たのではないか』」

いきなり核心である話を始めるゲンナイ

その言葉を聞き、コウシロウら以外の者は首を傾げる

（今は……故意に言葉足らずにしたみたいですね）

あの事件のことを挙げない限り、その疑問が生まれることはない

おそらく必要がないと思って省いたのだろうが、困惑する者を見る

とゲンナイはちらりとコウシロウに目配せした

説明していなかったのか、と言いたいのだろう

コウシロウがそれに苦笑いで返すと、ゲンナイは小さく息を吐いた

「結論から言おう……コウシロウの疑問は、当たっている」

今度は、コウシロウたちも驚いた

あくまで推測であり、真実だという確信はなかったのだ

それを、ゲンナイはいとも簡単に肯定してしまったわけなのだから、いくらコウシロウでも少し困惑する

「それは、タイチの身近に俺たち以外の選ばれし子供が居るっていうことか？」

「たしか、アタシたちの前にも選ばれし子供が居たって言っていたわよね？タイチの身近に、その選ばれし子供が居たっていうの？」

ヤマトとソラから、立て続けに疑問が発せられる

それに対し、ゲンナイは少し顔を陰しくした

「話をする前に、1つ約束してくれないか？」

声までもが険しくなり、部屋の中に緊張が走る

ミミは思わずパルモンを抱きしめ、ヤマトとソラは手を繋いでいた

「これからする話は、かつて君達に話した選ばれし子供たちの話ではない」

その言葉に含まれる意味は、つまり、彼らが教えられた選ばれし子供たちよりも前に、デジモンと人間の交流があったことを意味する

「これから話すことを、彼らに話してはいけない」

彼らとは誰なのか

その彼らこそが、タイチの身近に居る人だということのか

「今から話すのは、デジモンと人間が初めて交流したときのこと…
…つまり、デジタルワールドと人間界、2つの世界が交わった、き
っかけともいえる物語だ」

だけれが、唾を飲む音が聞こえた気がした

「そのきっかけに関わった子供たち……彼らこそ、最初の選ばれし子供たちと言えるだろう」

ゲンナイは、懐から一冊の日記帳と、1つのデジヴァイスを取り出す

日記帳には、ローマ字で『KOH TARO』と書かれている

それを見たタイチは、なんとなく（コウシロウと似てるな）と、心の中で思う

「この日記帳は、彼らの内の一人が残したデジタルワールドの冒険の記録。そして、コウシロウのパソコンに私が付け加えた、デジモンアナライザーの基になったもの。その所有者を」

日記帳を開き、デジヴァイスを机に置く

「泉光太郎」

その名を聞き、コウシロウは電流が走ったような気がした

「その仲間を、八神進、榊裕子、石田裕明、高石奈津子」

語られるのは、彼らの親の名前

「武ノ内淑子、泉政実、太刀川里江、霧雨佳江、城戸真琴」

コウシロウの育ての親である2人の名前までよばれる

「そして、河添静奈」

絶句する子供たちに、ゲンナイは告げた

「君達の親に、最初の選ばれし子供たちに、これから話すことを言
つてはならない」

ゲンナイは、日記帳をめくり、あるページで止めた

「彼らは、自らの意志でデジタルワールドの記憶を消去し、そうす
ることによって2つの世界の平和を守ったのだから。彼らが記憶を取り戻
すことは、絶対避けなければならない。だが、彼らの子供である君
達には、知る権利がある」

一息付き、続ける

「もう一度言う。これから話すことを、君達の親に話してはいけな
い。彼らが子供の時に体験したこの出来事を思い出したら」

ゲンナイの顔が、より険しくなった

「2つの世界には、かつてないほどの危機が訪れる」

場が、静まった

ゲンナイの話（後書き）

設定

八神進「ヤガミススム」（タイチ、ヒカリ父）
榊裕子「サカキユウコ」（タイチ、ヒカリ母）
石田裕明「イシダヒロアキ」（ヤマト、タケル父）
高石奈津子「タカイシナツコ」（ヤマト、タケル母）
泉光太郎「イズミコウタロウ」（コウシロウ実父）
河添静奈「カワゾエシズナ」（コウシロウ実母）
泉政実「イズミマサミ」（コウシロウ養父）
霧雨佳江「キリサメヨシエ」（コウシロウ養母）
太刀川里江「タチカワサトエ」（ミミ母）
武ノ内淑子「タケノウチトシコ」（ソラ母）
城戸真琴「キドマコト」（ジョウ父）

お願いがあります

今回の話で語られた11人の子供たちですが

彼らのパートナーが

ススム↓アゲモン
ユウコ↓プロットモン
ヒロアキ↓ガブモン

ナツコ↓パタモン
コウタロウ↓テントモン
マコト↓ゴマモン

までは確定しているパートナーデジモンです

他の人は残念ながら決まっていません

なので、読者の皆さんに決めていただきたいなあ、と

人物の名前を書いて、対応する『成長期デジモン』の名前を書いて
ください

オリジナルデジモンはでませんので悪しからず

尚、作者はあまりデジモンゲームを持っていません、すいません

あと、クロスウォーズは見てますけど、クロスはしません、ご了承ください

川原の邂逅（前書き）

おかげさまでパートナーデジモンが決定いたしました

川原の邂逅

よく晴れた、夏の日だった

少年、八神進は、川原の土手に寝そべっていた

広げたタオルを頭から被り、日差しを遮断する役目と、汗を吸い取る役目を同時に果たさせようとしているが、あまり効果はないようだ

事実、タオルは自分の汗でびしょびしょに濡れて既に吸収ができなくなっており、日差しのほうも、薄い布一枚では遮断しきれていない

荒い息をなんとか整えようとするが、激しい動悸はなかなか治まってくれそうにない

（はぁ……何だっただよ）

右腕を目に被せるようにして顔の上に置き、一度だけ深くため息を吐く

そして、まだ隣に座っているのであろう人物に、目を向けた

見たのは白いワンピースがヒラヒラと揺れる様だけだったが、それだけで十分だ

ススムはすぐに顔を元の位置に戻し、また、ため息を吐いた

（本当に、何だってんだ）

話は、30分前まで遡る

そのとき、ススムは地域のスポーツクラブでの練習を終え、帰宅していた

先ほどまでは同じクラブのメンバーも一緒だったのだが、今はススム1人だ

というのも、ススムの家は町から離れた小高い山の麓にあり、練習している場所からでは、片道徒歩一時間半かかるためである

とはいえ、ススムの家は行くのに時間がかかるだけであり、道は一本しかないため非常に行きやすい

川を辿り、上流に向かっていけばいいのだ

「あちい……」

タオルを首にかけ、うなだれるようにしてゆっくり歩いている

時折大きな水滴が道に吸い込まれるところを見ると、どうやらかなり汗をかいているようだ

「あの状況で……最後に走り込み……あの野郎ふざけやがって……」

思い起こすのは自分たちの指導をしている人間の顔

どうやら、クラブの練習が終盤にさしかかった頃、突然走り込みをやらされたらしい

ススムは、疲れたせいか虚ろになっている瞳で前を見つつ、小さく

愚痴をこぼし続けた

しばらく歩いていると、町特有の喧騒が過ぎ去っていく

代わりにやってきたのは、夏の風物詩といわれる蝉の声や、少し音が大きくなったように思える川のせせらぎだった

「……そもそも俺はミスなんか一つもしてねえってのに、あのヒゲゴリラめ、いつもいつも俺を目の敵にしやがって」

誰も聞いていないのを良いことに、ススムは少しずつ声を大きくしていく

「試合の時だつてそうだ。俺が完全試合やりかけた瞬間にピッチャー変えやがって。こちららまだ投げれたし、しかもそれで打ち込まれて逆転負けされてんじゃねえよ、あのクソヤロウ」

「あのー」

「しかもその後、負けたのは誰が悪いわけでもない、相手が強すぎたんだ、だとか？ふざけんなっつーの、誰がどう考えてもテメーのせいだったろうがよオタンコナス。アイツだつてあの試合で自分の番が来るなんざ思っても見なかったから肩だつてあつたまつてなかった上に、あんな場面で登板させられたらそりゃ緊張してコントロールも球威も落ちるってことぐらいわかれよなハゲチャビン」

「すいませーん……」

ここには今、彼以外の人物が……しかも少女が居るのである

「見目麗しい美少女に向かってなんてこというのよ！この……」

少女が拳を握り、腕を振りあげる

そして

「■■■■■■■■■■！！」
「いぶはあっ！？」

自らはそれ以上の事を叫びつつ、その少女

榊裕子は、ススムを殴りとばした

* * * * *

その日、石田裕明は走っていた

慌てて家を出たため、服の着用がどこかだらしないが、彼にそんなことを気にしている暇はない

父親から貰った懐中時計で時間を確認しつつ、ある場所を目指して走りつづける

（マズい、完全に遅刻だ）

走りながらも、なんとか服を整えようとする

だが、ヒロアキにそんな器用な真似ができるはずもなく、結局途中

であきらめた

きちんと着ていようが、だらしなく着崩していようが、結果は目に見えているのだから

(……間違いない怒ってるな、アイツ)

妙な確信を抱きながらも、ヒロアキは待ち合わせの場所へと急いだ
待ち合わせたのは、彼の幼なじみにして、クラスメート

恋愛感情の有無について聞かれると、双方うやむやな返事しかできはしないが、少なくとも嫌い合ってはいないはずだ、というのはヒロアキだけの意見である

実際、ヒロアキに人の心がわかるわけではないのだから、一方的な意見だとしても仕方がない

「やっと着いた……」

彼がやってきたのは、近くに川が流れる空き地だった

途中なにやらブツブツと呟いている少年を追い抜いたが、彼は気づいていない

荒くなった息を調えつつ、彼は周囲を見渡した

だが、そこにいるはずの姿はなく、彼はホッと息を吐く

そして、何かを思いつき、振り返った

「あら、遅かったじゃない」
「……………」

顔を目一杯使った笑顔は、しかし目が笑っておらず

飲んでいたのであろう清涼飲料水の缶は、スチール製なのに握力だけでひしゃげ

ヒロアキは、その姿を見た瞬間に、頭の中に選択肢を思い浮かべた

すなわち

1、謝る

2、逃げる

3、開き直る

4、とりあえずセクハラする

の4つである

ヒロアキは考えた

確かに謝れば、無事ではすまないが話は聞いてもらえるし、ある程度の手加減もしてくれる

逃げるとなるとそれ相応の走力が必要だが、彼はむしろスタミナ型

のため、瞬発力の強い彼女にはかなわないだろう

開き直ったら間違いなく殺される、だから論外だ

セクハラはな……いや、ちょっと待てよ

ヒロアキは否定しようとしたその選択肢から、思考を広げ始める

（そうだ、セクハラだ！アイツは今日半ズボン「正確にはハーフパンツ」をはいている！しかも上はＴシャツ一枚！ということは、だ！間違いなくセクハラの感触は伝わる！セクハラさえできてしまえばこっちのもんだ、少なからず動揺するはずのアイツの隙を狙い、すかさず逃げる！そうすればある程度のリードはできる上に、あの短距離型のアイツじゃスタミナがすぐ切れるはずだ！第一、セクハラした上で逃げられるなんて一石二鳥じゃないか！）

最低最悪の思考である

その間にも、相手の少女……高石奈津子は、すばらしいまでに目が笑っていない笑みで接近してきていた

手に持っていたスチール缶はすでにスクラップと化しており、額には青筋が浮き出ている

だが、ヒロアキはそれに気づくと、すぐに作戦を開始した

「あら？素直に殴られに……ひゃっ!？」

口を開いたナツコの隙をつき、その胸に触れた後、尻を一撫でする
案の定驚いたナツコを後目に、ヒロアキは一目散に逃げ出した

だが、ここで誤算が生じる

「待ちなさいよ！」

思いの外、ナツコの復活は早かった

ヒロアキが逃げたことに気づくとすぐ走り出し、すでに捕獲範囲内だ

（くっ、計画失敗か……マズい、殺される）

そこまで確信があるなら、最初からセクハラなどするものではない、
と思うが、彼は彼なりに精一杯だったのだ

多分、ではあるが

「捕まえた！」

「げっ……」

あっという間に捕まってしまい、ヒロアキは更なる選択を迫られた

すなわち、謝って殺されるか、抵抗して殺されるか、である

だが、今回の判断は早かった

ヒロアキは捕まった瞬間に土下座し、言葉を発する

「時間に遅れた挙げ句、セクハラなんてしてしまって申し訳ありません！」

ヒロアキはその後反省の言葉を述べるが、なにかおかしい

ナツコが、何もいつてこないのだ

不思議に思い、言葉を止めると、小さな声が聞こえてきた

「別に……あんたになら、触られても……」

予想外だ

予想外すぎて対処に困るほど予想外だ

ヒロアキは頭を下げたまま、必死に考えた

この状況、一体どうするべきなのか

しばらく悩んだ挙げ句、彼が出した結論といえば……

（本能に従うべし！）

先ほどの失敗を忘れたようである

ヒロアキは、善は急げと顔をあげ、立ち上がろうとした

「なんて言うと思ったわけ？」

その瞬間に、顔を蹴られ、ヒロアキの意識は闇に沈んでいく

最後に目にしたのは、「スッキリした」といいながら、満面の笑みを浮かべるナツコの姿であった

* * * * *

「はぁ……」

川原で膝を抱え、武ノ内淑子はため息をついた

近くにあった手頃な石を、川に向かって力無く投げる

ポチャン、と音を立て、静かな水面へと吸い込まれる様を見ながら、トシコはもう一度ため息をついた

思い出されるのは、今朝行われた母親との会話

「分らず屋……」

声に出して貶してみるが、気は晴れない

それどころかますます沈む一方で、トシコは腕の中に顔をうずめた

トシコの家は、代々続く華道の名家で、母親はその家本だ

そのためか、昔からしつけが厳しく、トシコと母が衝突することは、もはや日常茶飯事と化している

「私は華道なんてしたくないのに……」

また石を広い、川に向かって投げた

今度はすこし強めに投げたせいか、先ほどよりも遠くに落ちていったようだ

「……」

今度は無言で、石を投げた

振りきつた右腕はだらしなく下げたままにし、トシコはまた、ため息をついた

* * * * *

城戸真琴の休日は、昼まで眠ることから始まる

小学生とはいえ、学校1の天才と言われる彼が、そんな自堕落と言われてもおかしくない生活をしているとは、誰も思わないだろう

だが、マコト曰わく、昼まで眠るのは自身へのご褒美らしい

「んー、今日もいい天気だ」

背伸びをしながら、マコトは欠伸をした

つい30分ほど前に起きた彼は、昼ご飯の材料をかうために、近くのスーパーに行ってきたところだった

袋の中には、昼ご飯の材料の他に、いくつかの菓子が入っている

どうやら、勉強の間に食べるらしい

「んー、たまには遠回りしてみようか」

今日はいつもより暑いが、買ったものに傷みやすい物はない

ならば自分のために遠回りしない手はない、と、マコトはその足を近くの川へと向けた

水の近くなら、この暑さも凌げるだろうと考えたのだ

「んー、ゆつくり行こうかな」

マコトは、のんきにそう言った

*
*
*
*
*

泉政実は体を震え上がらせ、大きく口を開き

「ぶああつくしゅ！」

盛大なくしゃみをした

何故か上半身が裸のマサミは、なるべく日差しに当たること冷えをしのごうとする

上半身に着ていたと思われる服は、すぐそばにある大きな岩に置かれていた

普通と違うことと言えば、マサミが着ているズボン共々、びしょ濡れになっているところだろうか

「大丈夫ですか……？」

「え、あ、ああ、大丈夫……ぶえつくしゅ！」

突然話しかけてきた少女は、心配そうに見つめながらあたふたとしている

そんな少女を見ながら、マサミは考えた

そもそも、なぜこのような事態に、陥ったのかを

ほんの10分前の出来事だったはずだ

遠い親戚が遊びに来るから、駅まで迎えに行けと言われたのが、つい先ほど

こんな暑い日に外に締め出され、マサミはぶつぶつと文句ばかり言いながら歩いていた

途中、気絶した男子を笑顔で引きずる女子を目にしたが、マサミは全く気にしなかった

それどころか、いつの間にかその歩みを止め、視線は川へと向けていた

(……なんだ、あれは?)

彼の視線の先には、奇妙なポーズをして岸部に立っている少女がいた

少女は、しばらく同じポーズのままだったかと思うと、突然走りだす
しばらく走ると止まり、また奇妙なポーズをし始めた
なにやら川に向かって手を伸ばしているように見えるため、マサミ
はその手の先を見る

そこには、川に流される大きな桃が一つ

(……いやいやいや、桃って……いやいやいや)

目にしている光景を否定しようと、何度か目をこするマサミ
だが、何度見直してみても、そこに存在するのは桃だった

「うーん……あと、ちょっと」

しかも少女はそれを取ろうとしているらしい
ならば近くに落ちてある枝などを使えばいいものを、必死に手を伸
ばして掴みとろうとしているのだ

しばらく呆然としていたマサミであったが、少女の動きを追う内に
あることに気づいた

桃が、少しずつ岸から遠ざかっていくのだ

今なら無理をすれば届きそうだが、確実に落ちる

そうなる前に忠告してやろうと思い、マサミは少女の方に足を向けた

その時、少し強い風が吹いた

「あっ……」

変なポーズのせいでバランスを崩していた少女は、風に吹かれて倒
れそうになる

「！ 危ない！」

そのことに気づいたマサミはとっさに駆け出し、少女の体を岸の方
へ戻した

ただし

ジャバァン！

マサミ自身は、川へと落ちてしまい、桃は下流へと流されていったが

そのことを思い出していると、またくしゃみをしてしまった

マサミが（一応）助けた（という形になっている）少女……霧雨佳江は、何度もマサミを心配そうに見ている

服を乾かし初めてからすぐ、ヨシエになぜ桃を取ろうとしていたの

か聞いたが、結局はぐらかされてしまった

（あ、親戚の迎え……行っていない）

とはいえ、この恰好で行くわけにもいかない

ヨシエにバレないようにため息をつきつつ、マサミはまだ見ぬ遠い親戚に思いを巡らせた

* * * * *

太刀川里江は、鼻歌を口ずさみながら料理本を読んでいた

だいぶ前から使われているのか、その本はかなり傷んでおり、本にはペンでいろいろと書き込まれている

ただ、何故だかチーズケーキの欄にコチュジャンと書かれていたり、味噌汁の欄に生クリームと書かれていたり、明らかに間違ったアドバイスを書き込まれており、料理本としての役目を果たしそうに

ない

この料理本は、サトエが今朝、親から譲り受けたものであり、太刀川家の食事の全てがここに詰まっていると言っても過言ではないのだ

「あ、このあんかけ五目チャーハン風ケーキおいしそう!」

どんな味覚をしているのか疑いたくなるような発言である

「ふんふんふん」

上機嫌のサトエは、料理本に熱中するあまり、普段は訪れない川の近くまで来ていた

だが、それに気づく様子はなく、何度も料理本を見ながら頷いている

「このヨモギを混ぜた豚骨ラーメン塩鯖乗せもおいしそう!」

その後も耳を疑う料理名を口に出しつつ、サトエは川の近くを歩き

続けた

* * * * *

昨日のことだった

いつもお気楽でプラス思考が取り柄の両親が、息子の夏休みに乗じ

「18回目の新婚旅行に行くよ、コウタロウ」

「夏休みの間お世話してくれる親戚には話をつけてあるから、思う存分楽しんでらっしゃい」

と言って、今度はチェコだのスロバキアだのよく分からない場所に旅立っていった

言葉と共に渡された封筒には、目的地の最寄り駅までの切符と、駅から目的地までの簡易的な地図が入っている

それを見たコウタロウは

「またか……」

と言うようにため息を吐き、その2つを部屋から持ってきたリュックにしまう

事実、コウタロウの記憶の中に、両親と共に夏休みを過ごした思い出は無い

物心ついたときには、長期の休みの際にコウタロウを預けて旅行に行く両親、という図が完成していたのだ

とはいえ、何も育児放棄というわけではない

母親はいつもおいしい手料理を食べさせてくれるし、父親だって時間があれば遊んでくれた

そのように平日や週末の休みには、父親や母親との楽しかった思い出は存在するが、残念ながらゴールデンウィークを初めとする長期休みにおいて、コウタロウに両親との思い出などなかった

毎度のごとく、顔も名前も知らない親戚の家をたらい回しにされるばかりだ

（迷惑に決まっているのに……）

そんなことを考え始めたのはいつの頃からだろうか

おそらく、違和感自体は最初から感じていたのだ

物心ついたとき、コウタロウは丁度『お預かり期間』（コウタロウが自分でそう呼んでいる）の真っ只中だった

そのとき両親はノルウェーという国に行っており、コウタロウを預かっていたのは母の姉の家だった

ただ、その姉は、お預かり期間の最中お世話になった人の中で、一番ひどかった

その人には、丁度コウタロウの一つ下になる娘がおり、しかも一番手が掛かるころだった

その為か、コウタロウはその人にいつも怒鳴られた

コウタロウが悪いことをしているわけではない

これは自分に八つ当たりしているのだ

幼いながらに、コウタロウはそんなことまで理解してしまっていた

だが、それでも、怒鳴られた時にコウタロウから出る言葉は

「ゴメンナサイ……良い子にします……」

と言うものだった

そうすれば、その人の癪癢は治まると、分かっていたからだった

だが、そのとき以降、彼女の『お預かり期間』はなかった

それ以降の『お預かり期間』は、コウタロウは怒鳴られることなく、むしろ家族イベントであったのだろう海水浴に連れていってもらえたりもしたのだが、さすがに小学三年の頃には気づいていただろうか

（一度も……知ってる人に預けられたことがない）

最初は、それだけ両親と友好関係にある人が多いのだと思っていたが、しばらくすれば確信した

（やっぱり、僕がいたら迷惑なんだ……）

子供ながらに理解したその事實は、コウタロウの心を閉ざすには充分だった

お預かり期間の最中、コウタロウは常に良い子でいるよう努めた

そうすれば、迷惑をかけずにすむ

だが、それでも、コウタロウが同じ人に預けられることはなかった同時に、お預かり期間中、コウタロウを遊びに連れていく人も居なくなつた

そんなことを思い出していると、突然電話が鳴った

両親が忘れ物でもしたのだろうか、と、不思議に思いながら受話器

を取る

「はい、泉ですけど……」

『お、コウタロウ君かい？』

聞いたことのない声だった

また違う人であることは、切符を見たときに分かっていたが、少しは期待していたのだ

「はい、そうですが……どちらさまですか？」

『おっと失礼。私は今度君を預かることになった泉優明イズミマサアキというんだ』

マサアキと名乗った電話の向こう側の人間は、そのまま話を続けた

『明日、私が迎えに行く予定だったんだが、急用ができてしまったね……』

またか、と思った

最近このやり方で、コウタロウを迎えに来ないパターンが多い

「地図もありますし、ひとりで行けます」

そう告げると、電話の向こう側で、息を呑んだような気がした

その後聞こえてきたのは、まるで哀れみを含んでいるかのような、
そんな声

『コウタロウ君……つらかったんだな……』

何故だか、その声が深く胸に刺さった

『明日、息子向かわせる。写真を持たせてるから、あいつはすぐに君に気づくはずだ』

その後の言葉は、ほとんど聞こえていない

ただ、先ほどの言葉が、コウタロウの胸の中に突き刺さったままだった

翌日、コウタロウは既に駅にいた

（早すぎたな……）

時計を見ると、待ち合わせの時間より30分も早かった
どうやら、一つ早い電車に乗ってしまっていたらしい

一度はこちらから行くのかと考え、地図を見たのだが

「……はあ、やっぱり……」

その地図は、お世辞にも分かりやすいとは言い難かった

書いたのはおそらく母だろう、これなら幼稚園児が書いた方がマシなのではないかと思ってしまっただけ、分かりづらい

「しょうがないな……いつもみたいに地元の人に……」

地図をしまい、顔を上げる

そして、目があつた

「……えっと、何かついてる？」
「！ち、違います！」

数メートル先で、こちらを見ていた少女と

見たところ年下のようなが、この際誰だって構うまい

「ちょっと良いかな？道を聞きたいんだけど」

「へ、あ、はい、大丈夫デス！」

「……自然体でいいから」

苦笑いすると、少女は顔を赤くしてうつむいた

なんだか気まずくなりそうだったため、問題の地図を見せる

「ここに行きたいんだけど……」

そういつて目的地を指さすと、少女は地図を覗き込んだ

そして、目に見えて体が固まる

「……気にしないで、描いた人、絵が下手なんだ」

「そうですか……あ、ここならわかりますよ！」

まさか分かるとは思っていなかった

だが、分かるのなら好都合でもある

「案内頼めるかな？」

「はい！任せてください！」

きれいな満面の笑顔で、少女はそう言った

しばらく歩くと、川の近くにまで来ていた

地図にも川が描かれているため、おそらく同じものとさっする

ただ、何故だか川の近くには様々な子供が居た

あるところには、少女に殴られたあげく、襟を掴まれ前後に振られる少年

またあるところには、満面の笑みを浮かべた少女に土下座する少年ほかに、川原に座って石を投げる少女や、菓子がたくさん入った袋を持つ少年、さらに信じがたい料理名を口に出しながら、楽しそうに料理本を読む少女

そして、極めつけは上半身裸の少年と、そのそばであたふたしている少女

(……いったい、何があつたんだろう……)

心のそこから、気になった

川原の邂逅（後書き）

はじめに

パートナーデジモンについて

いろいろ考えた結果、ススムのアグモンとヒロアキのガブモン以外のパートナーデジモンを、すべて変えさせていただきました、ご了承ください

そして、パートナーデジモンの発表はいたしません、登場を楽しみにしてくれるとうれしいです

ではでは、失礼します

出会い（前編）（前書き）

多分前編、中編、後編の3部作になるかと

出会い（前編）

とある世界のとある場所

2つの巨大な影が、そこにはあった

「……やはり、止められぬか」

「……ええ。私達の内の2匹も行方知れずですし……」

大きな紅い翼を広げ、空に佇むその獣は、悲しそうな声で続ける

「……すでに、私の管理下にあった南地区では、世界の崩壊が始ま
つてしまいました」

「なんと……！では、既に綻びが……？」

「はい。見たこともない物体が所々に現れました。灰色の柱や茶色
くて重い蓋のようなもの……そして、水には稀に、見たこともな
い二本足の生物が映り込んだりもします……」

青い体をつねらせ、巨大な球状のものを身の回りに浮かばせながら、
竜のような生物は声をくぐもらせる

「……マズいな」
「ええ」

元々は4匹居た彼らも、既に2匹

だが、それ以上の事態を、青い生物は感じとっていた

「僅か一瞬だが……世界が崩れるぞ」
「……では、様子をみに行かせましょう」

大きな紅い鳥が高い声で鳴くと、どこからともなくいくつかの気配
が現れる

「南地区の東側にある島に行つて、様子を見てきてください。航行
手段には、彼を使わせます」
「わかりました」

一匹が返事を返すと、気配は急にきえて行つた
どうやら、また最初の2体にもどってしまったらしい

「……結果を待つほか、ないか」

彼らは、互いにうなずきあった

*
*
*
*
*

目の前で、信じられない事が起こった

突然、水がまるで生き物のように動き始め、川の近くに居た5人の子どもたちを飲み込んでしまった

続けて2人飲み込まれ、残るは4人

「な、何!？」

隣の少女も、なにがなんだか分かっていないらしい

コウタロウは、目の前でもう二人飲み込まれたのを見ると、少女の手を引き駆け出した

だが、時すでに遅し

「! うわあああ!？」

「きゃ ああああ!？」

2人とも、水に飲み込まれてしまった

* * * * *

「つつつ、何なんだよ、まったく」

どうやら気絶していたらしい

ススムは、妙な倦怠感を覚えつつも、目を覚ました

とっさに掴んだ手は、なんとか届いていたらしい

白いワンピースの少女と、しっかり繋がれている

「しっかり……ここどこだ？」

周りを見渡すと、まるでジャングルのような植物がたくさんあった
先ほどまで居たはずの川原はなく、自らが寝ころんでいたのも砂の上だ

「……とりあえず、起こすか」

かなり冷静な判断をくだし、ススムは未だ気絶している少女を起こしにかかった

「おい、起きろ」

体を揺さぶりながら、少女を起こそうとする

だが、少女はなかなか起きず、ススムはため息を吐いた

周りを見渡してみたが、何も無い

彼の荷物は、どうやら川原においたままになっているようだ

「……はあ。あるのは、こいつだけか」

ポケットからゴーグルを取り出し、頭に着ける

そして、未だ起きない少女を抱えると、ススムはあてもなく歩きだした

* * * * *

マコトは、突然わけのわからない場所に来て混乱していた

近くに居た少女2人に聞いてみたが、どうやら彼女らも自分と同じらしい

料理本を持った少女は、好奇心が強いらしく、先ほどから周りを見て歓声をあげている

もう1人の少女は、不安げに辺りを見渡しつつ、朝顔の形をした髪飾りをいじくっていた

マコトは、自らの手の内にあるレジ袋を眺め、思わずため息を吐く

（もっと買っておけば良かった）

相変わらずのズレた視点

だが、その時、マコトの背後の草が動いたことには

誰も気づかなかった

* * * * *

「……これ、どう思う？」
「……多分、生き物ではないかと」

マサミとヨシエの目の前には、赤い活発そうな印象を受ける、まるで炎を擬人化したような小型の生物と

白を基調としている色合いに、かわいらしい目つきと大きな耳のようなものがついた生物が

必死に、自分たちが生き物ではないと思わせるため、身動きをとらずにいた

「かわいい……」

ヨシエが見つめているのは、白い方

となれば、マサミが見つめるのは赤い方なわけで

(冷や汗、かいてないか……?)

白い方が整然としているのに対し、赤い方は冷や汗をかいて体が小刻みになっている

それを見て、マサミはこれらが生物であると確信した

出会い（前編）（後書き）

マサミとヨシエが遭遇したのはあいつ等です

次回、ナツコとヒロアキが……？

出会い（後編）（前書き）

多分正体分かるのが4匹ほどです

出会い（後編）

* * * * *

「ツノ……？」
「……よね？」

ヒロアキとナツコの目の前に、ソレは居た

何かの毛皮を被った、額にツノがある二足歩行の“カИБツ”

「……ぬいぐるみ……にしてはリアルだな？」
「でも、こんな動物見たこと無いわよ？」

2人して考え込んでしまう

なぜか、目の前のカИБツに恐怖心が抱けず、むしろ好奇心が勝り、動くに動けない

いや、2人とも、動く気がなくなっていた

「どうする？」

「……毛皮、剥きたいわね……」
「同感だ」

ヒロアキがカイブツの毛皮に手を伸ばす

カイブツが、必死に対抗策を考えていると……

「うわあああ！」

ヒロアキたちの背後から、ワンピースの少女を背負い、ゴーグルをかけた少年が走ってきた

どうやら、なにかから逃げているようで、顔が必死である

「！ お前ら、逃げろ！」

ヒロアキたちの存在に気づいたのか、その少年は声をかけてくる

誰かはわからないが、忠告に従おうと足に力を入れた

その時

「ま、待ってってばあ……僕は怪しいデジモンじゃないって言うてるでしょお……」

少年を背後から追いかけて、声をかける黄色い姿

まるで、巨大なトカゲが二足歩行しているかのような生き物が、少年を追いかけていた

「！ ナツコ！」

「分かってるわ！」

2人は、その姿を見た瞬間に目的を変えた

その巨大トカゲに振り向き、ヒロアキは左、ナツコは右から飛びかかる

「え？え？」

どうやら、トカゲは状況が読み込めていないらしい

「いまだ！」

ヒロアキが飛び上がり、ナツコが腰を下げる

そして、見事なコンビネーションで、トカゲを捕獲しようとしたときだった

「待てえ！」

「逃げるなあ！」

ヒロアキには、4つ

ナツコには、2つの小さな影がぶつかった

バランスを崩して倒れた2人の傍らを、先ほどのカイクツが駆け抜け、トカゲに合流する

「いてて……」

なにかが当たった場所を抑え、前を見る

そこには、トカゲとカイクツ以外に、6匹の“なにか”がいた

「……」

呆然として後ろを向くと、こちらも増えている

男が2人と、女が3人

年齢層は、みた感じではバラバラの印象を受けた

「何が、どうなってんだ？」

* * * * *

「う……」

額になにやら冷たいものを感じ、コウタロウは目を覚ました

うつすらと目を開ける

すると、そこには、心配そうな瞳でこちらをみる、少女の姿があった

少女は、コウタロウが目を覚めたのに気がつくと、顔を明るくする

「良かった！目が覚めたんですね！」

一瞬、その笑顔に、胸が高鳴った

だが、コウタロウはそれを気取られないために、わざと頭が痛いようにみせかけ、手を額に当てて顔を隠す

そして、聞き覚えのない声がした

「あら、目が覚めたようです」
「ほんなこてね！？さっきまでぐっすり寝とったとばい？」

澄んだような、凜とした声と、訛りがひどい声

声のした方を見て、コウタロウは絶句した

「ま、どっちにしろよかったばい」

「ええ。もし目が覚めなかったなら、この娘も泣いてしまっていたでしょうから」

まるで、クワガタのような機械的なものと、細長く白いキツネのようなもの

「お水見つけてくれてありがとね！二匹とも！」

「どういたしまして」

「気にせんでよかばい」

そして、それらと普通に話す少女がいた

出会い（後編）（後書き）

出してほしいデジモン募集

なるべく、ゲームのロストエヴォリューションにでているデジモン
をお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9253o/>

デジモンアドベンチャー 00

2011年10月8日03時55分発行